

出典：『呂氏春秋』卷十四「孝行覽第二」／ オリジナル問題

書き下し文

凡そ賢人の徳は以て之を知る有るなり。伯牙琴を鼓し、鍾子期之を聴く。方に琴を鼓して志、太山に在り。鍾子期曰く、「善きかな琴を鼓すること、巍巍乎として太山のごとし」と。少選の間にして、志流水に在り。鍾子期又曰く、「善きかな琴を鼓すること、湯湯乎として流水のごとし」と。伯牙の念ふ所、鍾子期必ず之を得たり。鍾子期死し、伯牙琴を破り絃を絶ち、終身復た(と)琴を鼓せず。以為へらく世に復た為に琴を鼓するに足る者無しと。独り琴のみ此のごとくなるに非ざるなり。賢者も亦た然り。賢者有りと雖ども、而も礼以て之に接する無くんば、賢奚に由りてか忠を尽くさん。猶ほ之を御すること善ならざれば、驥も自ら千里ならざるがごときなり。

現代語訳

だいたい賢者の徳というものは、その徳を理解する者がいるものである。(例えば、)伯牙が琴を弾き、鍾子期はその音を聴いた。(伯牙が)ちょうど琴を弾きながら太山(泰山)を心に思い浮かべていた。(その琴の音を聞いて)鍾子期が言った、「すばらしいなあ、琴を弾くその音は、高くそびえてまるで太山のようにだ」と。しばらくして、(伯牙は)琴を弾きながら川の流れを心に思い浮かべた。鍾子期がまた言った、「すばらしいなあ、琴を弾くその音は、勢いがよくてまるで流れていく川のようにだ」と。(このように)、伯牙が思い浮かべたことを、鍾子期は必ず聞き分けることができた。(その後、)鍾子期が死んで、伯牙は琴を壊し絃を断ち切って、生涯、二度と琴を弾かなかった。思うことには、世の中にはもうその人のために琴を弾くに値する者はいないと。ただ琴についてだけがこのようなのではない。賢者(について)もまた同様である。仮に賢者がいたとしても、その賢者に礼を尽くして応対する人がいなければ、

その賢者はどうして真心を尽くすことができようか（いや、できはしない）。（これは）ちょうど（どんな名馬がいても）扱い方が上手でなければ、一日に千里走る名馬でも自然に千里走ることができなくなるのと同じようなものである。

解答

問1 伯牙が思っていることを、鍾子期は必ず理解することができた。〔解答例〕

／伯牙が琴を弾きながら心に思い浮かべたことを、鍾子期は必ず聞き取ることができた。〔別解例〕

問2 ① 〓しゅうしんまた（と）きんをこせず。「きん」を「こと」としても可

② 〓伯牙は生涯、二度と琴を弾かなかつた。

③ 〓自分の琴の真の理解者であった鍾子期が死に、もうこの世には弾く価値のある人間はいないと思つたから。〔解答例〕

／鍾子期が死に、自分の琴を本当に理解できる人がいないならば、琴を弾く価値はないから。〔別解例〕

問3 おもへらく（おもえらく）

問4 なほこれをぎよすることぜんならざれば、き（も）おのづからせんりならざるがごときなり。〔解答例〕

〔なおこれをぎよすることぜんならざれば、き（も）おのづからせんりならざるがごときなり。〕

〔ごときなり〕は、「ごとき」のまほでも可

問5 (エ)

出典：蘇軾「日喻」 没人（『経進東坡文集事略』所収） / オリジナル問題

書き下し文

南方に没人多し。日々水と居るや、七歳にして能く涉り、十歳にして能く浮かび、十五にして能く没す。夫れ没する者、豈に苟に然らんや。必ず将に水の道に得る者有らんとす。日々水と居れば、則ち十五にして其の道を得たり。生まれて水を識らざれば、則ち壮なりと雖も、舟を見て之を畏る。故に北方の勇者、没人に問ひて、其の没する所以を求め、其の言をもつて之を河に試みるに、未だ溺れざる者有らざるなり。故に凡そ字ばずして道を求むることに務むるは、皆北方の没するを学ぶ者なり。

現代語訳

(中国の) 南方には(水に) もぐることのできる人が多い。(彼らは) 毎日水を相手に生活していて、七歳で水を歩いて渡ることができ(「水に足をひたして歩くことができ」、十歳で水に浮くことができ、十五歳で水にもぐることができる。そもそも水にもぐるということは、どうしていい加減でできることだろうか(、いい加減ではできない)。きつと「水の道」に(自分なりに) 得ることがあるのだらう。毎日水を相手に生活していると、十五歳で「水の道」を会得することができる。生まれてから水になじんでいなければ、一人前の大人になっても舟を見るとこわいと思う(ほど、水が大変苦手になる)。だから(水になじんでいない) 北方の勇氣のある人が、もぐることのできる人に尋ねて、もぐる方法を乞い求め、その言葉どおりに河で試してみても、溺れない者はいないのである(「皆溺れてしまうのである」。だからだいたい(地道に) 学習せず、「道」を求めようと一生懸命になることは、すべて(この) 北方育ちの人々がもぐることを学ぶこと(と同じ) である。

解答

問1 必^ス將^ニ有^{ラント}得^ル於^二水之道^一者^上。

問2 生まれてからずっと水になじんでいない者は、一人前の大人になっても、舟を見て恐れるほど水が苦手になる。(解答例)

問3 其所以没(本文4行目)

問4 いまだおぼれざるものあらざるなり(「あらざるなり」は「あらず」のままでも可)。

解説

問1 白文に訓点を付ける問題では、どんな句形・構文が使われているかをまず見つけよう。ここでは「將」と「有……者」に着眼する。

「將」は、名詞や動詞、前置詞(「(ト)もつて」と読む)、接続詞(「は夕」と読む)としても使われるが、動詞の直上に用いられている場合は、まず「再読文字」と見てよい。ここでも、直下に「有」という動詞がきているから、この「將」は「再読文字」と考えられる。再読文字「將」の読み方はすぐ思い浮かべられるはずだ。まず「將」を「まさニ」と副詞で読んで、次に直下の動詞を未然形で読んで「ント」と送りかなを付け、そして再び「將」に戻って「す」と読むのだった。ここでもその読み方を適用する。「將」の前の「必」は、副詞で「かならず」と読むから、「必將有」の部分には、「必將^ス有^{ラント}」と読むことができる。

「有……者」は、「……者有り」と読んで、「……という人がいた」「……というもの・ことがあった」ということを表す構文である。「者」は、漢文では、人間だけではなく、事物一般を指し示す語である。「……者有り」と読むのだから、訓点は「有……者」となる。

「有……者」の「……」にあたる「得於水之道」だが、この部分を品詞に分けると、動詞「得」+前置詞「於」+名詞「水之道」となる。動詞「得」は「う」と読む。動詞「得」とその下にある「水之道」の関係は、この間に「於」をはさむから、「述語―補語」の関係と考えられる。したがって、「水之道」に「ニ」という送りがなをつけ、「得^ウ於水之道」と読む。そして、この部分が「有……者」にはさまれているのだから、「有得於水之道」は、「水の道に得^ル者有り」と訓読する。「得」は「者」に接続するから、連体形に直して「うる」とする。訓点を付ければ、「有^リ得^ル於水之道^ニ者^上」となる。したがって、傍線部(1)を最初から

読むと、解答のようになる。

問2 現代語訳する問題であるが、傍線部に訓点が付いている場合は、語法の知識よりも傍線部全体の内容を問うことが多い。

この問題も、語法的に問題となるのは「雖」ぐらいで、指示語「之」の内容も簡単にわかるから、やはり、傍線部の内容を、問題文全体を見渡した上で説明することが求められているのである。

最初に「雖」の説明から。「雖」には、主に、「たとえ」としても」と訳す逆接仮定と、「くけれども」と訳す逆接確定の二つの用法がある。「雖」の上に主語が明記されている場合に逆接確定の用法であることが多い。ここでは「雖」の上に主語が明記されていないから、逆接仮定の用法である。「壯」は「壮年」の意。中国では、三十歳ぐらいの一人前になる年齢のことを言う。また、「畏」之の「之」は、直上の「見」の目的語「舟」を指している。

さて、傍線部の内容を説明しなければならないのだから、傍線部と直前の文との関わりを見てみる。直前の「日日く得其道」を解釈してみよう。この文は、さらにその前の部分から、「南方の没人」について述べているとわかる。ここに出てくる「其道」は、直前に書かれている「水之道」のことであるから、「十五而得其道」は、「十五歳で水の道を会得できる」と直訳することができる。さらに前の「夫没者、く必將有得於水之道者」から、「水の道を（に）会得できる」と、「水にもぐる」ことができる（「没」）のだから、「十五而得其道」は、本文1く2行目の「十五而能没」と言いかえることができる。つまり、傍線部(2)直前の文は、「『南方の没人』は、『毎日水とともに生活し、それ故に十五歳で水の道を会得し、水にもぐる』ことができる。」と言っていることになる。

これを受けて傍線部(2)の文が述べられていることを考えれば、傍線部(2)の「生不識水」は、前文の「日日与水居」とちょうど正反対の状態を表現していると解釈できる。だからこの部分は、「生まれてから毎日水と暮らしていなければ」と解釈できる。そして次の「則雖壯、見舟畏之」も、前文の「則十五而得其道」と対極の状態を言っていると考えられる。だから「則雖壯」は、「則十五」と対極の（「十五歳よりも歳を重ねて、一人前と言われる）三十歳になっても」という意味になる。そして「見舟而畏之」も、「而得其道」が、既に検討した通り、「水の道を得て泳げるようになる」という状態なのだから、その対極にあたる「舟を見てこわいと思うようになる」という状態は、「水にもぐるどころか、水がとても苦手で、水ではなく、そこに浮かぶ舟を見てさえこわいと思う」ような状態だと想像できる。したがって、「見舟而畏之」は、「大変水が苦手になる」といっ

た意味になる。以上をまとめればよい。

問3

指示語の指示内容を問う問題であるが、これはすぐに判ったはず。指示語は、ふつう、一度述べたことの言い換えとして使われることが多いから、指示内容を問われたら、まず、それより前の部分を探すがセオリー。指示語を含む前後の内容を見て、指示語の手掛かりをつかみ、それからそれに該当する部分を指示語より前の部分から探していく。ここでは、傍線部(3)を含む「試_二之_一河_一(之を河に試みるに)」という部分から、「之」が「河で試みる」ことができるものとわかる。すると本文を前に追っていけば、「之」に該当するのは、直前の「其言(その言)」しかない。この文では、目的語が述語の前に出され強調されている。普通の言い方をすれば「試_二其言_一河_一」なのだが、「其言」という目的語を強調するために「以」を付けて述語の前に出し、そして目的語の抜けた場所に代名詞「之」を置いたのである。

さて、「之」は「其言」のことだと判断できたが、ここにも指示語が使われているから、これはどんな「言」を指すのか、さらに本文の前にさかのぼる必要がある。「北方之勇者、問_二於没入_一、而求_二其所_一以没_二」と書かれていることから、「試」の動作主は「北方之勇者」であり、「其言」とは、尋ねられた「没入の言」であること、そして、言の内容は、「北方之勇者」の問い求めた「其所_一以没_二」であると判断できる。

問4

白文を書き下し文にする問題。要領は白文に訓点を付ける場合と同じである。ここでまず着眼しなければならないのは、「未」と「有……者」の部分である。「未」は下に「有」という動詞が来ているからすぐに再読文字と判断できる。まず「未」を「いまだ」と読む。そして直下の動詞「有」を未然形「あら」と読んで、再び「未」に返って打消しの助動詞「ず」と読むのである。「有……者」については、既に問1の解説で説明した。「有不溺者」は、先に「……」にあたる「不溺」を読んでから「者有り」と訓読することになる。「不溺」は簡単に「おほれず」と読めたはずだ。「不」は、下に来る動詞を否定する語で「ず」と読む。訓読する際、下の動詞を未然形で読んで返る。「溺」は古語で読めば「おほル」。下二段動詞だから未然形は「おほレ」となる。したがって、「有不溺者」は、「おほれず」者有り」と訓読できる。「ず」を、「者」に接続させるために、連体形「ざル」にする。漢文の訓読文では、「ず」の「ぬ」系の活用形(連体形「ぬ」、已然形「ね」)は使わない。

以上のことから、傍線部(4)を最初から訓読すると、「いまだおほれざるものあらず」となる。文末の「也」は、断定の語気を表

しているだけだから、読んでも読まなくてもかまわない。ただし、問題文中の他の箇所でも読んでいるならば、読んでおく方がいいだろう。文末の「也」には断定の助動詞「なり」の読みをあてている。断定の助動詞「なり」は、体言・用言の連体形に接続するから、傍線部(4)で「也」を読む場合は、「ず」を連体形に変えて「ざる」として、「なり」に接続させる。

以上で書き下し文の作り方についての解説は終わるが、ところで、この部分を正しく現代語訳できただろうか。「未_レ有_二不_レ潮者_一也」と、一つの節の中に、否定詞が二つ用いられていることに注意。「否定詞+否定詞」は「強い肯定」の意を表す。「潮れな_レい者はいなかった」ということは、「皆が溺れた」という意味になる。

出典：清・錢詠『履園叢話』「臆論」／ お茶の水女子大学・改題 95年

書き下し文

銀錢は一物、原より少なかるべからず、亦多かるべからず、多ければ則ち運用するに難く、少なければ則ち進取するに難し。蓋し運用には心を榮すを要し、進取にも亦心を榮すを要す、此に従りて一生勞碌し、日夜安からず、而して人も亦之に随ひて衰憊す。須く多からず少なからざるを要すべし、又能く足るを知りて撙節し、以て之を經理すれば、則ち綽綽然として余裕有り。余年六十にして、尚ほ二毛無く、称羨せざるは無く、以て必ずや養生の訣有らんと為す。一日、余一富翁一寒士と与に坐して談ず、兩人の年紀は皆未だ五十を過ぎざるに、俱に鬚髮蒼然、精神衰へたり。因りて余に修養の法を問ふ、余笑ひて答へず、別れて後に人に謂ひて曰く、「銀錢は怪物、人をして髮白からしむ」と。其の一は太だ多く、一は太だ少きを言ふなり。

現代語訳

金銭というものは物の一つであり、もともと少ななくてもよくないし、また多くてもよくない。多いと使い方が難しく、少ないと積極的に物事をするのが難しい。思うに、(多い金銭の) 使い方には心を悩ますことが必要であり、(少ない金銭で) 積極的に物事をするのも心を悩ますことが必要である。そのために一生あくせく苦勞し、昼も夜も落ちつかず、そして人もまたこのために疲れはててしまふ。(だから金銭は) 多くもなく少なくもないということが大切であり、また十分であると考えて節約し、金銭を取り扱えば、気持ちが悪く落ちつきゆとりが出てくる。私は六十歳であるが、白髪まじりの髪の毛がないので、(私のことを) ほめたたえ、うらやまない者はなく(「誰もがみな私をほめたたえてうらやましがり」、きっと(その若さを保つ) 健康の秘訣があるのだろう) と思っている。ある日、私は一人の金持ちと一人の貧乏人と一緒に話をしたが、二人の年齢はまだ五十歳を過ぎていないのに、どちらもそろってあごひげと頭

髪が白く、気力も衰えていた。それで（二人は）私に健康を保ち気力を張って生きていく方法を尋ねたが、私は笑って答えず、別れた後で人に語った、「金銭とは思議なもので、人の髪を白くさせてしまう」と。（その理由の）一つは多く持ちすぎること、一つは少なすぎるのである。

解答

問1 (a) けだ(し) (c) よ(りて)

問2 ある日

問3 (1) すべてからくおほからずすくならざるをようすべし、(すべからくおほからずすくならざるをようすべし)、

(3) Ⅱいまだごじゅうをすぎざるに、

問4 世間の人々は、私のことをほめたたえ、うらやまない者はなく、きっと若さを保つ健康の秘訣があるのだろうと思っている。

〔解答例〕

問5 白髪になってしまった状態。〔解答例〕

問6 冒頭 Ⅱ 須要 末尾 Ⅱ 理之（本文3行目）

特別問題

金銭が多いと使い方に心を悩まし、金銭が少ないと何かしようにもできず苦しむこと。〔39字・解答例〕

書き下し文

硯と筆墨とは、蓋し気類なり。出処も相近く、任用寵遇も相近きなり。独り寿夭相近からざるなり。筆の寿は日を以て計へ、墨の寿は月を以て計へ、硯の寿は世を以て計ふ。其の故は何ぞや。其の体たるや、筆は最も鋭く墨之に次ぐ。硯は鈍者なり。豈に鈍者は寿にして鋭者は天に非ざらんや。吾是に於いて生を養ふを得たり。鈍を以て体と為し、静を以て用と為さん。或ひと曰く、寿夭は数なり。鈍鋭動静の制する所に非ざると。借令筆鋭からず動かずとも、吾其の硯と与に久遠なる能はざらんことを知るなり。然りと雖も、寧ろ此を為し、彼を為すこと勿かれ。銘に曰く、鋭きこと能はず。因りて鈍きを以て体と為す。動くこと能はず。因りて静かなるを以て用と為す。惟だ其れ然り。是を以て能く永年なりと。

現代語訳

硯と筆・墨とは、思うに同類である。(それが必要とされ作られた)由来も互いに類似し、用いられ方や(人に)気に入られ大事にされる点でも互いに似ている。ただ長持ちするかしないかだけがそれぞれ違っている。筆の寿命は日にちで(「日単位で」)数え、墨の寿命は月で(「月単位で」)数え、硯の寿命は世代で(「家系の何代単位で」)数える。その理由(「筆・墨・硯の寿命が違う理由」)は何だろうか。その実体は(「それぞれの実体についていえば」)、筆は最も鋭く墨がその次である(「墨が次いで鋭い」。硯は鈍いものである)。どうして鈍いものの寿命が長くなく、鋭いものの寿命が短くないだろうか(「鈍いもののほうが鋭いものより寿命が長いのである」。その作用は(「それぞれの使われ方・動き方についていえば」)、筆は最も動き(が激しく)墨がその次である(「墨が次いでよく動く」。硯は静かな(「動かない」)ものである。どうして静かなものの寿命が長くなく、動くものの寿命が短くないだろうか(「動かないもののほうが動くものより寿命が長いのである」。私はそこで養生(「長生きの秘訣」)を理解した。鈍いことを(自らの)実質とし、静かなことを(自らの)作用(「行動原理」としよう)と。すると)ある人が言う、「長生きするか若死にするかは運命である。鈍

いか鋭いか、動くか動かないかが決めることではない」と。(理屈としてはそれがもつともなことで)たとえ筆が鋭くなく動かないとしても、私だってそれが硯同様に長い寿命を保つことはできないことぐらい知っている。(それは)その通りであるけれども、やはりこの「硯と同様鈍く、動かないこと」ようであることを心がけ、あの「筆のように鋭く、動きまわること」ようにはしないことにしたい。(よってこの硯に)銘文(を成してそれ)に言う。鋭くあることはできない。そこで鈍いことを実体とする。動くこともできない。そこで静かなことを在り様とする。ただそれで(自ら納得して)そのようである。だから長く用いられることができるのであると。

解答

問1 (ア)〓けだし

(イ)〓かぞえ

(ウ)〓むしろ

問2 A〓ただ長持ちするかしないかだけがそれぞれ違うのである。〔解答例〕

B〓どうして鈍いものの寿命が長くなく、鋭いものの寿命が短くないだろうか、いや、鈍いものの寿命は長く、鋭いものの寿命は短いのである。〔解答例〕

問3 a

問4 d

問5 硯

問1 基本的な読み(字義)の設問だが、語順による判断も必要である。

(ア)「蓋」この字は「ふた」という名詞としての訓もあるが、それでは意味が通じない。直後の「氣類也(同類である)」が述語句であることに気付けば、副詞の位置にあることがわかるはず。この字が副詞として機能している場合、「けだし」と読んで、続く内容が推量であることを示す。なお、「蓋」は副詞・疑問詞の位置にある場合「蓋」と同様再読文字として「なんぞぞる」と読むこともあるが、この場合は意味が通じない。

(イ)「計」意味は字を見ての通り「計算」などの熟語でなんとなくわかるが、直前に「以A」を伴う点から述語動詞である。(イ)を含む「筆之寿以日計」の部分が続く「墨之寿以月計」「硯之寿以世計」と対句(正確には三句以上の対応なので「類句」)になっている。「墨」の部分は「計へ」、「硯」の部分は「計フ」と送り仮名がある点から見て、八行で活用する動詞である。いうまでもなく「かぞふ(数ふ)」で、あとは(イ)の部分が日本語では連用中止法になる(つまり連用形になる)点だけ気をつければよい。

(ウ)「寧」これも多義語である。「やすし(やすらかなり)」「やすんず」「なんぞ」「いづくんぞ」「むしろ」など、さまざま読み(意味)が考えられるが、これも語順に注意。直後の「為」が述語動詞であるのだから、副詞「なんぞ」「いづくんぞ」接続詞「むしろ」が候補となる。この前後の構文が「寧為此」「勿為彼」が対応関係になっていることに気付けば難しくはない。「寧A、勿(無)B」——寧ろA(す)とも、B(すること)勿^なれ、B(する)よりもA(する)ほうがよい——の構文である。出題者の付した送り仮名は、必ずしもこの通りではないが、語順・構文の点から「むしろ」と読むと判断できる。

問2 現代語訳(口語訳)の設問の場合、まず前後の文脈を見直し、それを前提に考えること。

A 傍線部Aの前の部分が、硯と筆・墨とを「相近」と、その共通点・類似点を述べているということをまず押さえる。それを前提に傍線部分を見れば、「不相近」と、ここでは相違点を述べていることがすぐわかる。直後「筆之寿、墨之寿、硯之寿」とそれぞれの「寿」についての説明があり、その内容、さらに「寿」を用いた熟語の知識(たとえば「寿命」など)から、ここでは硯・筆・墨の寿命が違うことを言っていると当たりをつけるのは容易であろう。あとは「訳」を要求されているので、傍線部分の語・表現を丁寧に見てゆけばよい。「寿夭」は「寿」と「夭」が組み合わさった表現だが、これが対義語である点に注意。「夭」は「夭逝」という熟語があるように「早死に」「若死に」の義をもつ語。「寿」のほうについては、たんに「寿命」という熟語の日本

語での意味を考えるだけでは勘違いをするかもしれない。「長寿」「寿福」などの熟語でもこの字が用いられているように、この字にはもともと「長命」「長生き」の義がある。したがって「寿夭」は「長生きすることと早死に（若死に）すること」という意味である。「独」（ひとり）は「惟」「唯」（ただ）・「讒」（わづかに）などと同様、（普通は訓読の際に「ゝのみ」と副助詞「のみ」を伴って）限定の意で用いられる字。この場合のポイントは「何を限定しているか」で、「寿夭」を限定しているのか、「不相近」を限定しているのかの判断である。傍線部の前の部分の内容が共通点・類似点を言っているということ、傍線部以降が「不相近」相違点の具体的な説明であること（つまりこの文では相違点のほうにより重点があること）、以上の点から「寿夭」を限定していると判断する。「不相近」を限定していると考えると、「ゝが違うだけ」と、むしろ共通点・類似点のほうに重点を置いた叙述になってしまう。「相」は述語の前で副詞として機能し、「たがいに」「相手を」という意味になる。以上の点を押さえて訳してゆく。

B まず「豈く乎」の反語の形であることを押さえる。次に注目すべきは「而」で、接続詞として述語と述語を順接あるいは逆接でつなげる語。言い換えれば、この場合「鈍者寿」と「鋭者夭」がそれぞれ文として成立しているということ。すると、傍線部二文字目の「非」は構文上「鈍者寿」「鋭者夭」をそれぞれ否定しているということになる。つまり「鈍いものは長生きではない」と「鋭いものは早死にではない」を反語の形で括弧括弧していることになり、したがって本文の傍線部分で「非」は一箇所だけだが、訳文では「鈍者寿」「鋭者夭」それぞれを「ではない」と否定して、それを反語の表現にしないと意味が変わってしまうことに注意が必要である。

問3 選択肢に並んでいる熟語に関する知識があれば簡単な問題。a「命数」は「めぐり合わせ・運命」などの意。b「度数」は単純に「かず」、c「術数」は「謀りごと・企み」、d「曆数」は「曆の計算」の意。傍線部①は「寿夭数也」のところにあって、「長生きと短命は」何だと言っているのか、と考えればa「命数」を選ぶのに苦労はしないだろう。選択肢に並んでいる熟語は一般的なもののばかりなので、この程度の知識は持っていたい。

問4 すでに問1(ウ)のところで説明したように、傍線部分を含む「寧為此、勿為彼」は「寧A、勿(無)B」で、「BするよりもAするほうがよい」という意味になるのだから、傍線部「彼」は筆者が「しないほうがよい」と考えている事柄である。さらにこの一文が「雖然(しかりといへども)——そうではあるけれども」で始まっていることにも注意。つまり前の部分と逆接で「彼」より

「此」をしたほうがよい、と筆者は言っているのである。前の部分の内容をまとめれば、(長寿の秘訣は硯のように鈍く、動かないことだという筆者の考えに対して)「或(あるひと)」の「長生きか短命かは運命であり、鈍いか鋭いか、動くか動かないかによるものではない」という反論を示し、「借令」で筆者も「それはその通りである」と「或(あるひと)」の言葉を肯定した上で、「雖然」と逆接で設問部分につなげている。したがって筆者が「したほうがよい」と考えているのは「鈍く、動かないこと」で、「しないほうがよい」と考えているのは「鋭く、動くこと」と判断できる。なお、言わずもがなのことではあるが、a「筆」、b「筆墨」は「する」「しない」の対象にはならない。

問5 本文全体の趣旨をとらえていれば難しい問題ではない。「筆(墨)―鋭・動―夭(短命)」「硯―鈍・静―寿(長命)」で、筆者は「養生」の秘訣を「硯」のあり方に見ているというロジック。それがわかっているならば、設問部分が明らかに「硯」のあり方を言っているとわかる。なお、これも言わずもがなのことであるが、「養生」は答えとしては「硯」に劣る。設問部分を含む一文は「銘曰」で始まっていて、「銘」とは調度・碑などに刻んでおくその事物の由来や人の事績などを記した文章のことである。



会員番号	
------	--

氏名	
----	--